

フッサールにおける現出と身体の問題

鈴木 康 文

序

フッサールの現象学が主題とする「現象」は二重性を帯びており、そこでは現出概念がいわばかなめとなっていることは、よく知られている通りである。「現象(Phänomen)」という語は、現出すること(Erscheinen)と現出物(Erscheinendes)との間の本質的な相関関係によって二重の意味をもっている(III.14)。現象学は現象学的還元によってこの現出物が現出するという現象の二重性を開示し、その相関関係を問うことから始まる。本文においては、いわゆる発生論的な観点から、体験の側からの動機づけにおいて現出と現出物という相関関係を考察する。すなわち体験はなにゆえにそれ自身として体験されるのではなく、あるものの現出として機能しているかを、体験の側から主題化することを試みるものである。こうした問題をとくに身体能力性と制約性から考えていきたい。

以上を考察するために、まず、(1)現象学的還元を通して、自然的態度から現象学的態度への態度変更によって、主題としての「現象」が開示されて、現出物が現出することを素描する。つぎに、(2)対象意味の構成における地平志向性の役割を指摘して、そこで体験の構造を体験それ自身から考察し、さらに、(3)そこに機能している身体性を検証していくことによって、改めて現出について探求することを試みることにする。

1

自然的態度は、ごく普通に我々が生きている態度として規定される。すなわち、私は一つの世界の中に生きていて、いろいろの物体が目の前に端的にあるというように意識している態度がそれに当たる。このように実在的な世界がまさにそこに存在する「現実」として素朴に意識されるのは、自然的態度のなす

一般定立(Generalthesis)による(III.61)。現象学的還元とは、この一般定立を働かさないでおくことであり、自然的態度の対象をいわば直進的にみる態度を、妥当とせないことを意味する。すなわち定立された対象へと直接眼差しを向けるのではなく、対象の与えられ方を通して対象を見るのである。さて、そこで開示される現象は、見られたものは我々が見ている以上のものであるということである(VIII.8)。目の前の机をみるとき、現実に見ているのはたんに机の前面だけであり、その前面を通して当のものを机として規定しているのである。このような机という現出物と、その現出物の現出ということを開示し、現出の多様性を通して同一なるものを統一する意識の構成能作が、さしあたり「志向性」と呼ばれる。現象学はこの現出者が現出するという「現象」を、主題の一つとして位置づける。現実には体験しているのは現出物の現出であって、端的に現出物それ自身を体験しているわけではない。それにもかかわらず我々はその体験に留まらず、その体験を通して、実際に与えられたもの以上のものである現出物を見ている。こうしたことをフッサールは過剰思念(Mehrmeinung)とも表現しているが、この「より以上」(mehr als)という事象へ眼差しを向け変える方法が現象学的還元なのである。自然的態度においてはこうした事象はいわば素通りしてしまい、隠されたままになっている。それゆえ還元において何かが否定されたり、失ったりすることはない。自然的態度において妥当している内容を、そのまま保持しつつ変様して、現象学的な「現象」と化するのである。そこで次に、

『イデー』に即して、開示された現象を机の知覚を例にして記述してみよう。

いま目の前の机を見ているものとしよう。この場合見られた机は常に同一の事物であると意識され、そこではあるものが机として意味的に捉えられているのである。しかし机の知覚の方は意識の不断の流れのうちにあり、同一ということはありえない。つまり机は統一的なものとして現出するが、机の現出それ自身は、体験として連続的に変化する。同一の机は机の射映(Abschattung)の連続的な多様性において現出するのである。ここで知覚と知覚された机との間には志向的な相關関係が成立している。知覚された机は知覚に対して超越的であるが、しかしそれが机として意識されているが故に、志向的对象と呼ばれる。ここで意識の対象面がノエマ、意識の作用面がノエシスといわれる。知覚そのものは体験として意識に内在するので、「志向的」に対立する「実的」契機と呼ばれる。体験の実的契機は、ヒュレーとノエシスという二層をもつ。ヒュレーは感覚与件とも呼ばれるが、それはいわば素材としてそれ自身としてはなんら対象関係を持たない。ヒュレーは例えば知覚において統握(Auffassung)によって生化され(Beseelen)、対象の現出が形成されるのである。いわばノエシスは素材としてのヒュレーに形式を与えて志向的体験を形成し、そこに対象関係が成立するのである。アグイーレも言うように、現出からみると現出は一面ではヒュレーであると共に、他面において対象のアスペクトでもあり、二重性を示している。ヒュレーや作用としてそれを統

握するノエシスは実的契機として体験に属するが、ヒュレーのうちで自らを射映という仕方では現出するものはノエマに属する。志向の対象であるノエマ自身、その意味の規定において「ノエマ的な対象そのもの」と「ノエマの規定の相における対象」という二面性を保持している。後者は前者の意味的规定であり、あるものとして規定される当の内容のことである。前者はこうした意味的内容の極、意味の担い手であって、「すべての述語を捨象した純然たるX」とも表現されている。

以上極めて簡単に対象が現出することを素描したが、本論文で問題となることはヒュレーの位置づけである。ここで示されたようないわゆる静態論では、ヒュレーはいわば形式なき素材として機能しているだけで、それ自身がいかに機能しているかが問われていない。とくにヒュレーが対象の現出として機能していることを、ヒュレーの側からみていかなければならない。それゆえ次にヒュレーの構造を地平志向性を通して考察していくことにする。

先に示したように現出物が現出するという事態は、「より以上」であることとして規定された。机の知覚を例にすると、我々にはその前面のみが本来的に与えられ、体験されているにすぎず、その背面はなお知られていないにもかかわらず我々は当の物を机として知覚している。その場合、顕在的に知覚されている体験内容は、潜在的に今後知覚されるものとして予測される面と、すでに知覚されたがなお保持されている面とを、志向的に指示しているのである。すなわち本来的に与えられた一面的

射映体はそれ自身の中により以上の知を潜在的に指示しているのであり、それによって対象構成が成立している。つまり、「あらゆる顕在性は潜在性を含蓄しており」、しかもこの潜在性はそのつどの顕在的体験自身の中に、志向的に予描され自我によって現実化されるものである(811)。そして顕在的な体験の中で直観された内容が指示している他の諸側面は、まだ単に思念されたものとして未規定だが、規定性の構造として類型性を備えている。例えば机のなお見られていない背面に関して色や型という知があらかじめ予描されている。このように知覚対象はそのつど一面的にのみ現出するが、それには常に類型的な地平性が伴っており、それによって対象性が構成されるのである。しかしこの場合、トイニッセンがいうように「より以上」であるということは二重性を帯びているのである。すなわち一方では、直観された机の前面はまだ直観されていなくて単に思念されているだけの机の背面を動機づけているのであるが、他方では机の前面は机そのものを志向しているのである。しかし前者のような直観された机の前面が机の背面を志向することも、後者のような机そのものへの志向によって始めて機能しているのである。さもなければ直観された内容が「机」の前面であることもいえない。この対象そのものは、すでに述べたように、意味の担い手として意味的に規定しえないのである。この場合この対象そのものはいかにして知られるのだろうか。それへの志向性によって始めて地平志向性が機能しているのであるから、対象そのものがあらかじめ識られてい

ればならないことになる。対象そのものへの気づきによって始めて体験があるものの現出として機能しうるのであるが、こうした気づきはいかなる知であるのかが問われなくてはならない。そこで次章ではこうした問いを手がかりに、現出を成立せしめる条件を体験それ自身の側から考察することにしよう。そこでまずヒュレー自身を構造化する身体の自己意識であるキネステーズから探求することにする。

2

キネステーズ (Kinasthesie) は運動感覚 (Bewegungs-empfindung) とも表現されるように、運動と感覚という二つの契機から成り立つ「自己意識」のことで、眼球運動とか頭を動かすことなどがその例として挙げられる (XI. 13)。それゆえキネステーズは(空間的に)運動している対象に関する感覚ではなく、また空間の中での場所の変化という意味も持たない。つまり例えば眼球運動といっても物体としての眼の移動をさしているわけではない。キネステーズは、ノエシスとしてヒュレーと相關的に機能する身体の運動意識のことである。それは、(現出物の)現出を前提として述べると、「知覚対象をできるかぎり全面的に所与性へともたらす」(EÜ. 83)働きとして規定される。ある対象に関心を向けている場合、我々はその対象へと眼差しを向け、また頭や身体を動かしたりすることによって、その対象の多様な側面の「現出仕方」である像(Bild)を通して、当の対象を或るものとして捉えることができるのである。それ

ゆえ「当のキネステーズ的な系列と知覚現出とは相互に意識の上で関わりあっている」(XI. 14)のである。例えば対象は像において与えられ、眼球運動によって像から像へとという総合的な移行の中で構成される。その際、眼球運動による系列は自我の意のままになる。例えば目をつぶることによって、像の系列を中断することができる。それゆえ対象の現出はキネステーズに依存していることになる。こうした身体性の意識は主観的で自由な体系をもっており、「わたしはできる」(Ich kann)という能力性として意識される。しかしこうしたキネステーズの能力性も像を任意に変えることはできない。例えば対象に関心を向け続ける際、その対象の現出は(内部)地平というあり方で、あらかじめ示されており、この点でキネステーズは現出に制約されている。ここにキネステーズ的動機づけとして、「もしいならば、その場合である」(Wenn so)という連関が成立しているのである。

こうした点は、ヒュレーに関しても固有の構造を形成することになる。すなわち感覚与件は単に与えられているのではなく、方位づけられて与えられているのである。こうしたことは、感覚契機がそれ自身においていわゆる感覚与件であるアスペクト与件と位置与件という二重性を保持していることを示している⁽⁵⁾。キネステーズの系列はこの両者の相関性の中で機能しているのである。こうしたアスペクト与件と位置与件の相互制約において対象の構成が可能となるのであり、それなしには対象の構成は成立しない。

さらにまた、こうしたアスペクトと件と位置と件の相互制約は、内的時間意識とは異なつた主題化によつて見出しされるのである。時間意識である意識の流れは、原印象と過去把持および未来把持という位相をそれ自身の中に含む「生き生きとした現在」という事態である。流れとしての意識においては、流れ去ることにおいてそれ自身の中に担っている同一性が主題とされる。この同一性は体験されるだけで現出しない。このような内在的な対象は現出と現出物という差異性が生ぜず(IX¹⁰)、そのつど新たな位相のもとで与えられている。それゆゑと件を体験流において主題化するか、あるいはキネステーズとの連関においてとりあげるかによつて、内在と超越という二つの領域が構成される。自然的態度における心と物という二元論もここに起源をもつと考えられる。

超越の対象である(現出する)現出物はキネステーズにおいて始めて構成されるのであり、その能力性がなければその対象を見ることもできない。しかしキネステーズは超越の対象を構成するにあつて必要な条件であつても、たんにそれだけでは対象構成は成立しえない。与件相互の中から論じることが、その与件が(現出物の)現出であるとはいへなくなる。キネステーズ的な動機づけにおいて「より以上」ということが成立しているが、これは現出物の現出を特徴づける「より以上」ということとただちに同一視することはできない。キネステーズをとおして体験される内容はまた他の体験内容を動機づけるが、そのような事態からだけではその体験内容が現出であるとはいへな

くなる。

上述したことを例えば単眼によるキネステーズを例にして検証してみよう。視覚領野において、その中心と縁との連関は、上下、左右という秩序をもち、それが空間構成の最初の段階を形成している。我々はその視覚領野の中で、像が眼球運動と連関して動くことを体験する。像は視覚領野の中心において最も明晰であり、縁においては十分には見えない。しかし縁にある像に関心を向け、その像を領野の中心へ動かすことによつてその像はより以上に見えるようになる。そしてまた目を元にもどせば、像もまた元にもどることを体験する。ここに「もしであれば、その場合である」というキネステーズ的動機づけが成立しており、像はより以上の内容をもつものとして体験される。しかしこの「より以上」ということは像の体験内容に関して述べられたもので、そこからその像が或るものの現出仕方として「より以上」という構造をもつとは言えない。このことは、両眼のキネステーズや、身体全体を用いて対象の周りを回ることにおいても当てはまるところ。両眼の運動において二重の像の重なりから奥行きがえられ、また対象の周りを回ることによつて対象に関する閉じられた面が構成される。しかし対象それ自身が前提とされない場合、両眼においては類似した二つの像が見い出されるだけであり、対象の周りを回つても、周期的に同一の像があらわれるという開かれた領野が成立するだけになる。領野とキネステーズ的体系との一定の連関は「志向ー充実」という構造をもちうるが、対象の意味充実ということと

直ちに重ならない。そこで次に、触覚与件も主題化することを通して身体について考察することによって、与件が与件として機能する条件をみていきたい。

3

前章においてキネステーズ的な動機づけから「より以上」という構造を論じ、そこからキネステーズが現出の一条件であるにしても、なお別の契機に関して考察する必要があることを示した。そこで本章においては、視覚与件の他に触覚与件も考慮し、両者の共働性の可能性から身体的能力性を主題とし、それによって現出の条件を問うてみたい。

先にキネステーズの例として視覚を論じたが、しかし或るものが或るものとして認識される場合、それは単に見られることによってばかりでなく、手触りなどによって何であるかが確認される。その場合対象は視覚的にも触覚的にも構成されるが、視覚的な対象と触覚的な対象という二つの対象をもつわけではない。すでに示したように、知覚はその本質として地平構造をもち、その地平によって対象が構成されるのであった。しかし知覚の多様性として視覚の他に触覚も考慮にいたした場合、地平に関してもそのつど別々の地平をもつ。すなわち、我々は視覚内容に関する地平ばかりか触覚内容に関する地平をもち、しかもそれぞれ別々の方位づけを体験することになる。もし前述したキネステーズ的動機づけにのみ基づいてみる限り、我々は視覚に関するこの一そこ関係(例えば、よく見えるーよく見えな

いの関係)を体験したり、触覚に関するこの一そこ関係(例えば、触れるー触れないの関係)を体験したりするだけで、両者は関わりをもちえないことになる。しかし現実には、両方の地平は全く異なる内容をもち、例えば視覚内容が触覚内容になるということはありえず、そしてしかも我々は一つの対象を一定の方位づけにおいて見、そして触っているのである。そこでは一つの位置与件が体験されるだけであり、このように位置与件が与件として機能するのは身体の「方位づけ零点」(Orientierungspunkt)によるのである。「私の身体はあらゆる方位づけや方位づけ変化の中心として、主要なキネステーズによって方位づけ変化を生起しているが、しかし自らは統一として方位づけ変化の中で与えられない」(K.V. 270)のである。すなわち、この場合述べられた身体は方位づけの機能源泉であって、それ自身方位づけられることはない。フッサールはこの方位づけ零点を「絶対的なここ」(absolutes Hier)とも表現しているが、これは先のこの一そこ関係を成立せしめる条件なのであって両者はまったく異なったものである。ランドグレーベが言うように、「絶対的なここ」はその背後へと遡行することの不可能な「絶対的事実」(absolutes Faktum)としてあらゆる活動と機能の可能性の超越論的条件なのである。この絶対的事実は、本質直観され意味的に把握されるような事実ではなく、逆に意味的把握を可能とする条件なのであり、方位づけという意味もそれによってのみ機能しているのである。

キネステーズの機能は、この身体の「方位づけ零点」によつ

て始めて相互に共働しつつ、唯一の体系を形成するのである。

また身体は、身体分肢に局所づけられている感覚器官によって感覚与件を構成する機能として知られる。その際身体はこの「方位づけ零点」によって自らを構成しつつ、諸器官を方位づけているのである。ここで最も重要な役割を果しているのは、触覚における身体の二重感覚である。例えば右手で左手を触る場合、左手は単に触れられているばかりでなく、触器官としても機能し触感覚をもつ。そこでは「触れられる器官が触れる器官になりうるという」転換が生じ、「触れるとともに、触られる器官の機能上の並存性」が見い出される(XV, 298)。こうしたことは先の右手に関してもあてはまり、つまり右手も局所づけられて与えられつつ、触感覚をもつのである。そこでは一対の感覚与件が同一の位置与件のもとに体験されている。この統一によって身体は、物体として構成されるときにも構成する機能として二重性を保持しているのである。そしてあらゆる物体が知覚においてそれ自体一挙に全面的に把握されえず、一面的に射映という仕方で現出するもの、このキネスターゼの身体への局所づけに基づく。それゆえ身体の「絶対的なこ」は、体験が現出として機能するとともに、その現出が現出物の一面でもあることの条件となっているのである。

こうしたことを対象の側から改めて考えてみることにしよう。現出物は現出を通して論じられるものであり、それ自体を主題とし、その現出から切り離して考えることできない(XV, 180)。対象そのものはその意味の規定によってのみ対象なので

ある。しかし対象はそのつど意味的に規定されつつも常に規定しつくされないものである。それゆえ対象そのものは意味の規定から身を退けるが、それ自身は規定の源泉として規定可能な未規定性という地平構造をもつ空虚地平と呼ばれる。そして対象そのものはそのつどの意味の規定に関する「意味の担い手」として同一の極でもある。すでに述べたようにこうしたことによって始めて対象が現出するということが言い得るのであるが、対象そのものへの気づきは「あらゆる場合にあらかじめ先取されている」(X, 18)のである。むしろそれはなにか生得的な知を意味しているわけではない。身体からみれば、身体は常に触発され、そのものを受容しているのであり、状態としては少なくとも最低次の能動性のもとにある(XV, 304)。例えば衣服に触られていたり、また睡眠中も布団に触れられていて、まったく触発されないということはありえない。それゆえ身体は対象に関して常に「居合わせている」(Dabeisen)のであり(XV, 311)、だからこそ物の現出にとって身体が常に機能しうるのである。それは何か空間的に隣合っているということではない。この居合わせていることは、意識の上で、「絶対的なこ」である身体と共属し合っていることであり、それがキネスターゼ的意識の中にあらわれているのである。キネスターゼの「共になす」(mitin)ということが、「常に事物のかたわらに居合わせていることとして、身体の現出仕方と他の事物の現出仕方とを本質的に結びつけている」(XV, 274)のである。それゆえ現出の条件は身体の「方位づけ零点」にあるとともに、それが

機能しているのはキネステーズ的意識の上で「居合わせている」ことにおいてであって、そこに現出の条件がみられるのである。

結

本論の目的は、体験の側から現出を論じることによって、現出の条件を探ることであった。そこではまず、体験自身が「より以上」の構造をもち、それが現出物と現出との間の「より以上」の構造の前提として機能していることを確認した。しかし体験がそれ自身に留まらず、現出として機能するには一つのキネステーズ的意識においてであり、そのキネステーズ的体系の唯一性は「絶対的ここ」である身体の唯一性がその条件として機能していることによるものであった。そしてこの身体の唯一性が、キネステーズ的意識において「居合わせている」ことにおいて非主題的にあらかじめ知られているのであり、その共属性が現出を成立させるのである。

註

フッサールからの引用において、『フッサールアーナ』からは巻数をローマ数字で、*「Erfahrung und Urteil」*は(ED)と略して示し、ページ数はアラビア数字で表した。

(一)フッサールにおいて現出概念は極めて多様に用いられているが、本論においては現出物を対概念とする限りでの現出

を論じる。また本論で述べている対象も現出する現出物という意味に限定されていて、時空上に実在し自我に対向するいわゆる客観的な対象の構成については特に空間構成を主題的に扱わなければならないので、本論では論じ得ない。

(2) Aguirre, A., *Genetische Phänomenologie und Reduktion*, *Phänomenologica* Bd. 38, Den Haag, 1970, S. 133.

(3) 拙論「フッサールにおける対象の問題」、『倫理学』第四号 一九八六年参照

(4) Theunissen, M., *Intentionaler Gegenstand und ontologische Differenz*, in: *Philosophisches Jahrbuch*, 70, 1963, S. 351.

(5) Claesges, U., *Edmund Husserls Theorie der Raumkonstitution*, *Phänomenologica* Bd. 19, Den Haag, 1964, S. 64f.

(6) それゆえ本論においては現出が主題として取り扱われるので、時間論の中での与件の構造を論じることとはしない。

(7) Vgl. *ibid.*, S. 68ff.

(8) Landgrebe, L., *Das Problem der Teleologie und der Leiblichkeit in der Phänomenologie und im Marxismus*, in: *Phänomenologie und Marxismus I*, hrsg. v. B. Waldenfels, Frankfurt a. M., 1977, S. 86f. (邦訳、『現象学とマルクス主義』第二巻所収、白水社、一九八二年)

(すずき・こうおん 筑波大学大学院哲学・思想研究科在中)